

◆伊藤洋二 選 ～「諳んじたい俳句 88」～

秋風や模様の違ふ皿二つ

原 石鼎

句会で選んで頂いたお気に入りの句を、砥部焼の絵皿にして「自分史」に編纂しています。焼き物の楽しみは、想像と実際の葛藤かと。絵画は納得して筆を置くが、それは紅蓮の炎に委ね、想像を尽くして実際に待つ。それは、期待感又は失望感かも知れぬ。これは、句会の遣り取りもその通りとつくづく思う今日この頃。「春風や気色の違ふ皿十枚」。

をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏

「ありおりはべりいまそかり」。古典のラ行変格活用と習ったのは、伊勢物語の七七段。「いろはにほへとちりぬるを…あさきゆめみしゑひもせすん」。誦文のいろは歌。見目麗しき「かな」の国に生まれたことに感謝。この愚稿を書けるのも「彼女」のお陰です。全て平仮名の句をお粗末ながら一席。「まねをしてはらりとうなるこぶしかな」。

春近し雪にて拭ふ靴の泥

沢木欣一

有り難いことに、到る所をアスファルト舗装され、泥道を歩く機会が少なくなつた。為に僅かな段差に蹴躓きやすく、膝関節のグリースが不足し、よちよち歩きとなり、赤ちゃん返りしつつあるのだ。時の流れに身を任せれば、いずれは暗黒世界の冥途道。ならば行こう泥に塗られし遍路道。「古希近し穆（もく）にて暈（ぼか）す木瓜の花」。

くらがりに歳月を負ふ冬帽子

石原八束

帽子は邪魔なので被る機会は少なかった。ところが最近ちょいちょい世話になる。春のゴルフ帽子、夏に麦藁帽子、秋は祭りの鳥打帽子、冬が毛糸のとんがり帽子。で、その商品札に購入年月日を書き、捺印しておく。置き忘れの紛失対応もあるが、万が一、山や道に迷い、捜索隊の方の確認用にと。「永き日に命運を負ふ掛け帽子」。

象よりも大きく涅槃し給へり

有馬篝子

筆者の住む町の、海より低き干拓地から石鎚山連峰を仰ぎ見ると、涅槃仏の御

姿に見える。当地では「おねはん」と云う、お釈迦様の入滅の日にちなんでの常楽会が旧暦二月十五日にある。涅槃絵には十大弟子達や様々な動物、虫たちがおり、枕元の地面には白い象が伏せ悲涙を流している。

赤い椿白い椿と落ちにけり **河東碧梧桐**

黒澤明監督の白黒時代劇、「椿三十郎」で、隣の侍屋敷から遣水に乗って流れてくるモノクロームの赤い椿、白い椿は、総天然色のそれよりも、真っ赤真っ白で、次々と水口から現れる様は、「色彩」対「時間」と、「静寂」対「喧騒」の一大スペクタクルなのだ。宇宙と生命が満ち溢れた名句中の名句、僭越ながら筆者も一句。「早い桜遅い桜と咲きにけり」。

牡丹散て打かさなりぬ二三片 **蕪村**

「めんこ」は、当地では「べったん」と呼んでいたが、一昔前の我々の間で熱狂的な人気を誇っていたゲームである。当時人気のあった「丹下左膳」「月光仮面」「怪傑ハリマオ」が印刷されたカードを取り合う。最初は勝ち負けの付かない「べべこ」と云う特別扱いをしてもらうが、悪ガキ連中の手解きを受けながら、取って嬉しく取られて悔しい人間関係論を学んだものだ。「お盆明けて従兄弟忘れし二三枚」。

戦争と疊の上の團扇かな **三橋敏雄**

「戦」の字の「単」には「はたく、叩き落とす」の意味があり、「戈」には「ほこ、武器」の意味がある。「團扇」とは害虫を打ち払う、打つ翳（さしば）で、病魔などを撃ち払う魔除けであったとか。平和な家庭の「疊」に置かれた団扇が戦争と云う不幸を追っ払っている。左右に扇げば天使の風が、上下に扇げば悪魔の風が、筆者は冷や汗を斜めに扇ぐ。

ひらひらと月光降りぬ貝割菜 **川端茅舎**

貝割菜とは、出たての大根の芽で、二葉が恰も小さな貝が割れたようだと見たてられ命名された。種には約三年の発芽寿命があるそうだ。一方、世界最古の花、大賀ハスの種は、調査終了前日の夕刻に、泥炭層の中から女生徒により発見された。ひと粒が育ち、昭和二十七年、二千年の時を経て、ピンクの大輪を

咲かせた。「まじまじと満月仰ぐ蓮の花」。

しづかなるいちにちなりし障子かな 長谷川素逝

谷崎潤一郎先生の随筆『陰翳礼讃』は、確か現代国語の教材で、「西洋文化では部屋の隅々まで明るくし陰翳を消す事に執着したが、古の日本ではむしろ陰翳を認めその中でこそ生える芸術を作り上げる」云々とあった。それは、障子が醸す陰翳だとか。我が家では、玄関障子の近くに燕が営巣。「帰還なるいちいち啼きし燕かな」。

鮎落ちて美しき世は終りけり 殿村菟絲子

鮎は一年で一生を終える。「年魚（ねんぎょ）」とも呼ばれる所以である。人間の仕掛けた“友釣り”を掻い潜り、一網打尽の“鮎やな”を擦り抜け、落ち鮎となり種を保存する“真面目もん（者）”である。戯言を並べる不真面目な筆者の解説は続く…。